

非同盟運動の親しい同志である金日成主席とブルーノ・クライスキー

ヨーロッパ・チュチェ思想研究学会理事
オーストリア金日成・金正日主義研究会会長
トーマス・レシュ

金日成主席は、非同盟運動の強化発展のために大きな貢献をしました。朝鮮民主主義人民共和国は、領土においては小さな国ですが、金日成主席は、構成国の経済状況を改善させるために多くの時間と資金を投じました。

多くの外国の元首が金日成主席を訪問して、自分たちが抱えている問題にたいする助言を求めました。

金日成主席は、多忙な中でも訪問客のために時間を割いて談話を交わしました。彼らは、自分たちが抱えている諸問題の正しい解決にたいする助言を得て本国に帰りました。

金日成主席は、多くの科学者と活動家を他国に派遣して、その国の経済と農業の発展を援助するようにしました。今も発展途上諸国の多くの青年たちが、朝鮮民主主義人民共和国で勉強しています。

1970 年にオーストリア社会主義党が全国選挙で勝利し、ブルーノ・クライスキーがオーストリアの首相となりました。スウェーデン首相オロフ・パルメとともに、ブルーノ・クライスキーも、東西間の対話でヨーロッパの中立国が積極的な役割を果たすことにより、新たな世界戦争から世界を守らなければならないと考えていました。

彼はまた、全世界の解放運動家とも双務的会談を始めました。彼はリビアのムハンマド・アル・カダフィとパレスチナのヤーセル・アラファトも訪問しました。この両国家の指導者たちが、社会主義でない国に招かれたのは初めてのことでありました。

中立的で自主的な国であるオーストリアはまた、社会主義諸国との双務関係を発展させるためにも努力しました。その中でオーストリアは、1974 年に朝鮮民主主義人民共和国と公式外交関係を樹立しました。同年に、朝鮮民主主義人民共和国は、初めて非社会主義国に自己の大使館を設立しました。この運動の重要性を認識したため、ブルーノ・クライスキーは、オーストリアが非同盟運動側ではなかったが、非同盟諸国の政治指導者と多く接見しました。

残念ながら首相を勤める間にブルーノ・クライスキーは金日成主席の接見を受ける機会には恵まれませんでした。

1983 年、ブルーノ・クライスキーは首相職を離れたので、もう多忙なこ

とはありませんでした。彼はすぐ、ある大きな代表団と一緒に平壤に行って金日成主席の接見を受けました。

金日成主席は、ブルーノ・クライスキーをあたたかく迎えました。多くの平壤市民が通りに出て、オーストリア前首相を歓迎しました。

初めて金日成主席と接見し、大規模の歓迎を受けたクライスキーは、感動して身の置き所を知りませんでした。当時、ブルーノ・クライスキーの健康状態は非常に悪かったです。彼の腎臓は、もはや自己の機能を果たせない状態でした。金日成主席は、ブルーノ・クライスキーの健康を回復させるために可能な限りの対策も講じました。金日成主席は、クライスキーに珍しく貴重な高麗薬も送り、朝鮮の医者一人を常に同行させました。

朝鮮民主主義人民共和国に滞在する間、ブルーノ・クライスキーは、数回も金日成主席と接見しています。

金日成主席とブルーノ・クライスキーは、国際政治情勢について談話を交わし、金日成主席は朝鮮民主主義人民共和国の政治経済状況について説明してくれました。

金日成主席とブルーノ・クライスキーは、非同盟運動が世界の平和と非同盟国家を発展させる上でもっとも重要な運動であることについて認めました。

金日成主席とブルーノ・クライスキーは、帝国主義者に国を奪われると、どんなに悲惨な生活を強いられるかをよく知っていました。

金日成主席と同様にブルーノ・クライスキーも、自己の故国を離れざるを得ませんでした。社会主義者であり、ユダヤ人であったため、ブルーノ・クライスキーは、1938年にオーストリアがドイツのナチスに併合されたとき、スウェーデンに避難せざるを得ませんでした。クライスキーは10余年後にオーストリアに帰ってきました。

ブルーノ・クライスキーがオーストリアに帰った後も、金日成主席は依然として彼にあたたかく接しました。金日成主席は、オーストリアに朝鮮の医者を送り、薬品も定期的に送りました。

こうした特別の治療によって、ブルーノ・クライスキーは数年間も自分の健康を維持することができました。その治療によってブルーノ・クライスキーは、再びスキーを楽しむことができました。

金日成主席は、ブルーノ・クライスキーにたいし眞の同志として接しました。生前にブルーノ・クライスキーは、朝鮮民主主義人民共和国が収めた成果について大きな関心をもっていました。

彼が残した遺産の中には、朝鮮民主主義人民共和国の歴史と政治制度、金日成主席の生涯と業績について書いた図書が多くありました。